

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 27 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520294

研究課題名（和文） 英国映画の描くインド象の解明

研究課題名（英文） Elucidation of Indian Images in British Films

研究代表者

田口 哲也（TAGUCHI TETSUYA）

同志社大学・文化情報学部・教授

研究者番号：00145103

研究成果の概要（和文）：旧宗主国の英国人監督がインドやインド社会を描いた映画作品群のポスト・コロニアル的な解釈を通して、また独立後の主要なインド人監督による映画作品の分析を通して、ヒンズー教を母体とする伝統文化と近代化の狭間にあつて揺れるインド社会の諸問題がどのように読み取ることができるか、また日本を含む国際社会のインド理解がどうあるべきかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Through the post-colonial interpretation of British films on Indians and the Indian society and then through the analysis of the major socio-cultural Indian films, both narrative and documentary, produced by Indian directors since Independence in 1947, our research has clarified how India has seen and continues to see its divided and multifarious identity between traditional Hindu cultural values and modernization and has shown some of the key ways for the international community including Japan to interpret and understand modern-day Indian culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：インド、英国映画、大英帝国、ポスト・コロニアリズム、アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

19世紀的な文学による表現が20世紀の映像表現にどのように転化されているか、またエドワード・サイードの言う「オリエンタリズム」がインドを描いた英国映画にどのように具体的に現れているのかを踏まえて、今日のインドにおける映像表現がめざしているものを探ろうとした。

2. 研究の目的

今日のインド社会がどのような問題を抱えているのか、即ち、インド社会の総合的な理解を映像表現を通して分析することを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、まず、英国映画が描いたインド像を分析し、次に植民者か

らの視点がどのように超越されたかを実際のインド映画を総合的に分析することによって追求した。

4. 研究成果

(1) 国内での主としてウェブを用いた文献調査により、本研究の調査目的に合致した資料をあらかじめリストアップして、2009年11月からは主に海外のアーカイブの調査研究を行った。研究代表者の田口は英国のロンドンにあるBFI(British Film Institute)のアーカイブ、およびフランスのパリにある映画研究所が所蔵する文献や映像資料を調査した。パリでは上記の研究所に加えて、国立国会図書館(ミッテラン)やポンピドゥー芸術文化センターでも文献調査と資料収集を行った。

ヒンズー教を中心とした伝統文化と近代化の間であって揺れるインド社会の姿が英仏のインド理解からは完全に抜け落ちていること、またそのような英仏のインド理解が日本を含む現在の国際社会のインド理解に決定的な影響を与えていることが上記の調査から判明した。この間の調査結果をもとにして田口はSouth and Southeast Asian Association for the Study of Religionや、日本比較文化学会で研究発表を行い、また、それらの研究成果の一部を学会論文や著書のかたちで公開した。研究分担者のクロスは同様にこの間の研究調査から発展させた大衆文化理論を構築し、その理論を用いて事例研究を行った。その成果は、Southwest/Texas Popular Culture and American Culture Associationで発表され、同学会から高く評価されているほか、インド南部での第14回ケララ国際映画祭に参加し、マラヤラム映画に関する知見を深めた。

(2) インドの独立は宗主国イギリスがその植民地経営の高コスト性から脱却する意思を持っていたために実現した。この仮説を実証すべく入手可能な経済データを用いて独立以前と独立後の両者の相互経済依存が縮小するのではなく、むしろ拡大してきたことを明らかにした。そしてこのような相互依存構造がどのように両者の文学的、映像的表現に反映されているかをポスト・コロニアリズムの観点から分析を行った。

まず、インド映画の思想的な出発点が初代首相ネルーの理想主義にあったことをシラム・ベネガル監督の作品分析を中心に明らかにした。ネルーの理想主義は現代インドが直面している最も深刻な問題の根であること、そして、不可触選民と女性の権利拡張というインドの政治的な課題が旧宗主国イギリスの階級問題や女性の権利拡張と鏡面に映る像のように対応している点は注目に値する

研究成果である。

続いて、この植民地と宗主国の政治的な課題が対応しながら拡大していく現象はポスト・コロニアリズムの理論的展開においては一般的であることを主にマサオ・ミヨシのポスト・コロニアル理論を中心に用いて検証した。なお、研究分担者のクロスはニューデリーで開催された第7回IAWRT女性映画祭に参加し、そこで得た知見をもとに現代インド映画をアジア的な文脈の中に位置づける試みを行った。

(3) 本研究を推進するうえで明らかになった最重要課題はカースト制度からの脱却を目指す社会層の動きの文化論的分析と考察であった。イギリスからの独立後、インドは冷戦構造の枠組みの中で社会主義的政策を実行し、また同時に民主的な政治制度を導入することによって、近代的な統治システムを確立した。しかしながら、ガンジーを建国の父とする国民会議派が中心になって生み出した国民意識はヒンズー教徒を中心としたものであったために、他の宗派やヒンズーのヒエラルキーの最下層に位置するものたちは、精神的かつ社会的に大きな負い目を背負わされることになった。

冷戦構造が終焉し、1991年の国家の基本方針の大転回により、市場経済の導入、社会基盤と情報技術の発展によって、ガンジーたちによって作り出された国民意識、換言するならヒンズー的秩序は瞬く間に崩壊する。貧困の問題、家族の変質、改宗などが例えば大衆映画作品ではどのように反映しているかを詳細に分析することによってインドにおける国民意識、宗教意識の変化を考察した。この研究成果は研究代表者の田口による4th SSEASR Conference, Thimphu, Kingdom of Bhutan June30-July 3, 2011での発表と分担研究者クロスの論文に結実した。また、2010年に文化情報学部の文献室に収められたマサオ・ミヨシ文庫のポスト・コロニアリズムに関連する資料を用いて本研究の理論的枠組みを構築したが、その成果は田口によってMasao Miyoshi Tribute at USCD 2011で公表された。この招待講演の様子はユーチューブでも見ることができる。

最後に、本研究から生まれた我々の文化理論をさらに普遍化し、国民意識の変化とメディア、とりわけ大衆娯楽メディアとの相互依存性に関する一般理論を田口は日本英文学会関西支部第6回大会(2011年12月18日、於関西大学)のシンポジウムで提案した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

1. Robert Cross, Rajesh S. Jala's *Children of the Pyre: Observing Life at the Bottom of India's Caste System*, 言語文化、査読有、14巻2/3号、2012、209~233
2. 田口哲也、文化情報学部所蔵 マサオ・ミヨシ文庫について(1) —ポスト・コロニアリズムと環境の視点から人文学を再編する試みについて—、文化情報学、査読有、第6巻第1号、2011、31~37
3. Robert Cross, Shyam Benegal's *Ankur and the Nehruvian Woman*, 言語文化、査読有、第13巻第2号、2010、89~115
4. 田口哲也、非都市化の文法、比較文化研究、査読有、89巻、2009、1~3

〔学会発表〕(計6件)

1. 田口哲也、現代アメリカにおけるメディアの転換、日本英文学会関西支部(招待講演)、2011年12月18日、関西大学(大阪)
2. Tetsuya Taguchi, *Mathematical Sciences conquers Humanities: The Future of Digital Education, Trespassing: The Future of Humanities, a tribute to Professor Emeritus Masao Miyoshi* (招待講演)、2011年10月28日、University of California at San Diego (USA)
3. Tetsuya Taguchi, *Mountains in Zen Buddhism, South and Southeast Asian Association for the Study of Religion*, 2011年6月30日、Royal University of Bhutan (Thimpu, Bhutan)
4. Robert Cross, *James Bond and the Demise of the English Gentleman?*, *Southwest/Texas Popular Culture and American Culture Association*, 2010年2月10日、University of New Mexico, Albuquerque, NM
5. 田口哲也、非都市の文法、日本比較文化学会、2009年6月13日、久留米大学(久留米)
6. Tetsuya Taguchi, *Japanese Zen Tosses Water on a Century of Fire*, *South and Southeast Asian Association for the Study of Religion*, 2009年6月4日、Universitas Hindu Indonesia Denpasar, Bali, Indonesia)

〔図書〕(計2件)

1. ジョン・ソルト著 田口哲也監訳、思潮社、北園克衛の詩と詩学—意味のタペストリーを細断する、2010、501+xiv
2. 山下昇、田口哲也、他、英宝社、メデイ

アと文学が表象するアメリカ、2009、394(329-351)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口哲也 (TAGUCHI TETSUYA)
同志社大学・文化情報学部・教授
研究者番号：00145103

(2) 研究分担者

R. J. CROSS
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：70278464